

食品安全委員会 in 北海道
地域のオピニオンリーダーとの意見交換会～遺伝子組換え食品～

日 時： 平成25年10月31日（木）14:00～16:00
場 所： 北海道庁 7F 農政部第1中会議室
主 催： 食品安全委員会・北海道
参 加 者： 食品安全委員会 山添康委員、食品安全委員会事務局 姫田尚事務局長
北海道食の安全・安心委員会遺伝子組換え作物交雑等防止部会特別委員、
消費者、農産加工業者、農業生産者等9名

プログラム：

- ◇話題提供 「遺伝子組換え食品の健康影響評価について」
「遺伝子組換え作物の栽培ガイドラインについて」
- ◇意見交換

概 要：

【遺伝子組換え作物の作出の動向について】

《質問》資料によるとH25年度に安全性審査が終了している遺伝子組換え（GM）作物は283種。前年度の倍となっているが、国内の流通状況、今後の増加予測はどのようなになっているのか。

《回答》1品種でも挿入されている形質の数はそれぞれ違う。例えば、1品種に複数の除草剤耐性が組み込まれているものも1品種とカウントされている。当初は単一の農薬に対する耐性を開発・登録していたが、最近の品種は複数の形質を入れたものが主体になってきている。挿入する新たな遺伝子が増えているということではなく、既に承認されている遺伝子の組み合わせが増えている。既存の登録品種同士の掛け合わせは今後も増えると考えられる。組換え体を添加物にも利用したりするなど、使い方が増えている。

《質問》安全性の評価基準は、統一的基準にならないのか。

《回答》GM食品は、新しい技術を応用した食品なので、評価も完成したものではない。実際の使用経験を踏まえて変更していくこともあり得る。除々に統一的になっていくと思う。

《質問》認可されているものは多いが、直接、人の口に入るものは少ないのか。食用には、どのようなものがあるのか。

《回答》日本ではパパイヤ、ジャガイモ程度で少ない。大豆は食用はかなり意識して非GM体を輸入しているが、値段が高くなっている。トウモロコシは家畜飼料。油脂原料はGM体が殆どだが、製品にDNAは残らない。大豆でもトウモロコシでもナタネでも導入する遺伝子は同じ。使用経験により淘汰され、安全なものが残っている。

《質問》最近2年間で、新しい遺伝子は開発されているのか

《回答》殆どは、農薬の耐性遺伝子を入れることで、気候変動にも影響を受けにくく安定して収穫できるものを選抜している。また、雄性不稔形質の導入は、最近2年間、増加している。交雑をある程度防ぐことができるため、消費者の理解が得やすい傾向にある。爆発的に増えているということではないが、今後、売れ行きが良ければ増えていくのではないかと。それと、雄性不稔は採種できないので、メーカーは生産者に継続的に種苗を買ってもらえる。

《質問》雄性不稔の系統に、いろいろな遺伝子を挿入するということか。それとも、雄性不稔の形質を作るといふことなのか。

《回答》どちらも上手くいくものと、いかないものがあると考え。生育的に不利にならないことが条件になるのではないかと。

《質問》導入遺伝子が少ないということは、少数の会社の品目を認可しているということなのか？

《回答》組換え体が普通になる以前から種子業界は寡占化していた。基本的な育種自体に巨大な資本が必要。組換え体の開発が寡占になっているのではなく、寡占になっているところが組換え体を開発しているということ。新しい導入遺伝子を実際にフィールド試験にまで持っていくのは、費用がかかるため大企業にしか出来ないのと、限られたメーカーになっているのは事実。

《質問》突然、市場から消えた品種はあるのか

《回答》リスク評価はしているが、それまでは把握していない。

《質問》今後、GM作物を栽培するのに都合のいい国はどこになるのか。

《回答》メーカーは、基本的に気候変動に影響を受けないものを作ることを目指している。乾燥地帯のようなところ向けに作っていくと考える。日本、EU、オーストラリアは抑制的な政策を取っているが少数派。世界全体ではGM作物は伸びていくと考えられる。

《質問》味噌醤油業界では、5年前のGM体比率は30～50%だったが、昨年のデータでは80%になっていて驚いた。2013年産では、M社の販売促進キャンペーンがあり、GM大豆の売り込みがあった。アメリカ、カナダの生産者の高齢化や異常気象により、若手農家は収益重視になっている。味噌業界は非GM大豆を輸入している。契約栽培だが、割増金を払い高い価格で購入している。欧米の意識の高まりにより、非GM大豆は高騰してきている。今後は、ブラジル、ウクライナ、ハンガリーなどが輸入先として有望になってくるのではないかと。

《回答》輸入元の多様化に際しては、アフラトキシンなど様々なリスクの考慮も必要。

【遺伝子組換え作物の悪影響について】

《質問》これまで、GM食品による健康被害はあったのか。

《回答》危険なものは開発段階で中止している。アメリカのEPAで取り下げになる。日本まで評価依頼がき

たものはない。過去に飼料用トウモロコシについてアレルギーの可能性が指摘され、販売中止になった。その件で、組換え体は危険だと言われるようになった。それ以降はGM食品の安全性についての事件はない。事件が発生すると企業側も研究をするので、有害なものが発生する確率は低い。

《質問》タンパク以外で、予期せぬ毒物が出現したことはあるのか。

《回答》汎用されているものについては無い。

《質問》GM体を長期間栽培した場合の影響についての取組があまりない。そろそろ環境への影響を考える時期ではないのか。

《回答》農林水産省は、GMナタネとGM大豆の非GM体との交雑について、港湾で調査している。現在、厳しい状態にはなっていないと聞いている。

《質問》アレルギーについて、問題の大きさの程度がわからない。自然界では、植物における新しい遺伝子の発現は日常茶飯事。その場合のアレルギー評価はナンセンス。GM体によるアレルギーと、自然界での遺伝子の発現によるアレルギーの違いの評価は研究の結果を見る限りでは難しいと思った。GM体の問題としては、むしろ環境に対する影響のほうがインパクトが大きいのではないのか。

《回答》アレルギーは誰に出るか予測ができないことが問題。慎重にならざるを得ない。将来的にアレルギーの原因が特定されていくことで、品種改良のように自然選抜されていくものの中でも、好ましいものと好ましくないものが選別されていくのではないのか。GM体については、品種を同定できればよいのではないのか。パパイヤは遺伝子配列が解読されているが、それまでは、GM体の遺伝子配列は実はわからないでいていた。

《質問》遺伝子操作を行ったことがわかる研究は進んでいるのか。

《回答》遺伝子配列がわかっているものは検出できる。遺伝子配列が公表されておらず、改変された場所がわからないものは、検出確率が下がる。許可されていないものが流通している場合、すぐにはわからない。どの国でも登録されておらず遺伝子配列がわからないGM体については、コントロールが難しい。

《意見》害虫抵抗性コーンも最初は評判が良かったが、段々と耐性害虫が出てきたとかセンセーショナルな報道をみるようになった。更にはびこってしまうと、更にいろいろな遺伝子を組み込むことになり人間に良くない状態になると考えられる。

《食品安全委員会より》消費者の受け止め方は千差万別。普通の農薬でも耐性は出てくるが、科学的な安全性をコミュニケーションでどう伝えるかは非常に重要なポイント。特に農薬やGM技術については、個々人の基本的な考え方が出てきやすい。

《質問》現在使っている農薬が効かなくなってくると、更に違うタイプのものを使うようになるの

ではないか？

《回答》大手メーカーは、毒性量と必要な使用量の間にマージンが大きいものばかりでなく、物質の性質として、効果があつてなおかつヒトに対して非常に安全性の高いものを選抜している。グリホサートという農薬も健康影響が評価されていて、ヒトに対してかなり毒性が低いことがわかっている。ヒトへのリスクの高い製品が導入されることは考えにくい。植物によく効くものがヒトに対しても危険だと考えるかどうかは考え方次第だと思う。

【遺伝子組換えの表示について】

《質問》現在のGMに関する表示について、消費者からみるとわかりにくいところが多いように思う。食品表示法の制定で、今後、一本化するような方向になるのか。

《回答》世界的に見ても、組換え表示をしない、組換え表示をする、混入率とか、非常に両極端な対応になっている。消費者が納得することが重要な要素になる。消費者がどういった形なら受け入れられるのか、納得するのかは、コミュニケーションしながらやっていくことが必要。また、表示をするということは、誤表示に対して取り締まることが出来なければならない。製品に原料のDNAが残らない油脂の場合のように、GM体と非GM体を原料としたものの間に差がなく調べようがないものは、取り締まることができず、表示が不可能。

【遺伝子組換え作物栽培のガイドライン等について】

《意見》生産者団体は、道がH16年に策定したガイドラインを踏襲している。消費者の不安がある中で、生産者は生産を回避しているが、研究は必要であると考えている。道のGM条例は、しっかり進めて欲しい。TPPについて、GM表示についての交渉内容が見えてきていない。日本の表示の仕組みはディフェンスしていただきたい。

《質問》輸入の非GM大豆の価格が高騰しているので、豆腐業界は経営が苦しい。ホテルの偽装表示のように、価格が高くなるとGM大豆を混ぜて売ってしまうことが、今後予測される。監視体制はどうか。

《回答》なかなか難しいところ。FAMIC（農林水産消費安全技術センター）ではコンスタントに調査している。新しい分析法の研究を続けているので、検出できるものは増えてくると思う。

《質問》北海道にはブランド維持のために条例を策定している。他府県の条例に関する意識はどのようなになっているのか。

《回答》国内で条例を設定しているのは3県で、届出制をとっている。ガイドラインや指針を定めている府県もある。